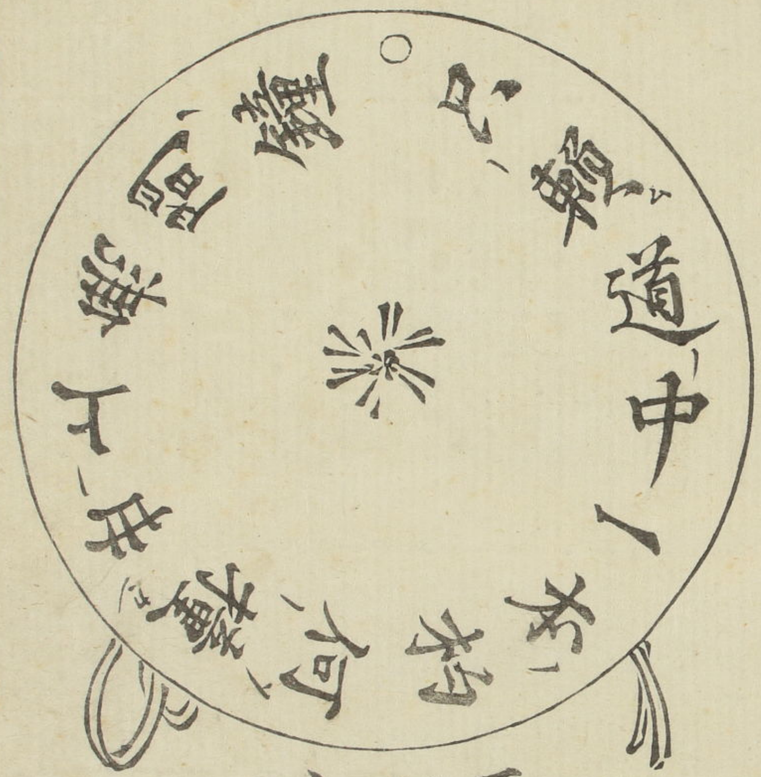
特別
へ13
4447
1

八13
4447
1

於西村
いせ物
東西
桜之戯作

至
都文國輝

八藤



伊勢物語上の巻

法 吉 蔭 抜之我 画

○爰に男ありけり。今の京を住うきものとおもひなして、東の国に行ふ。しるべきもの多くして、人数多くなりぬべき国、あり。その国の守、将の子なりけり。その国の人、男を惜しみあたらしがりて、国の守にいはせてやらず。男、なほ行かんとて、国の境、相坂の関を越えぬ。

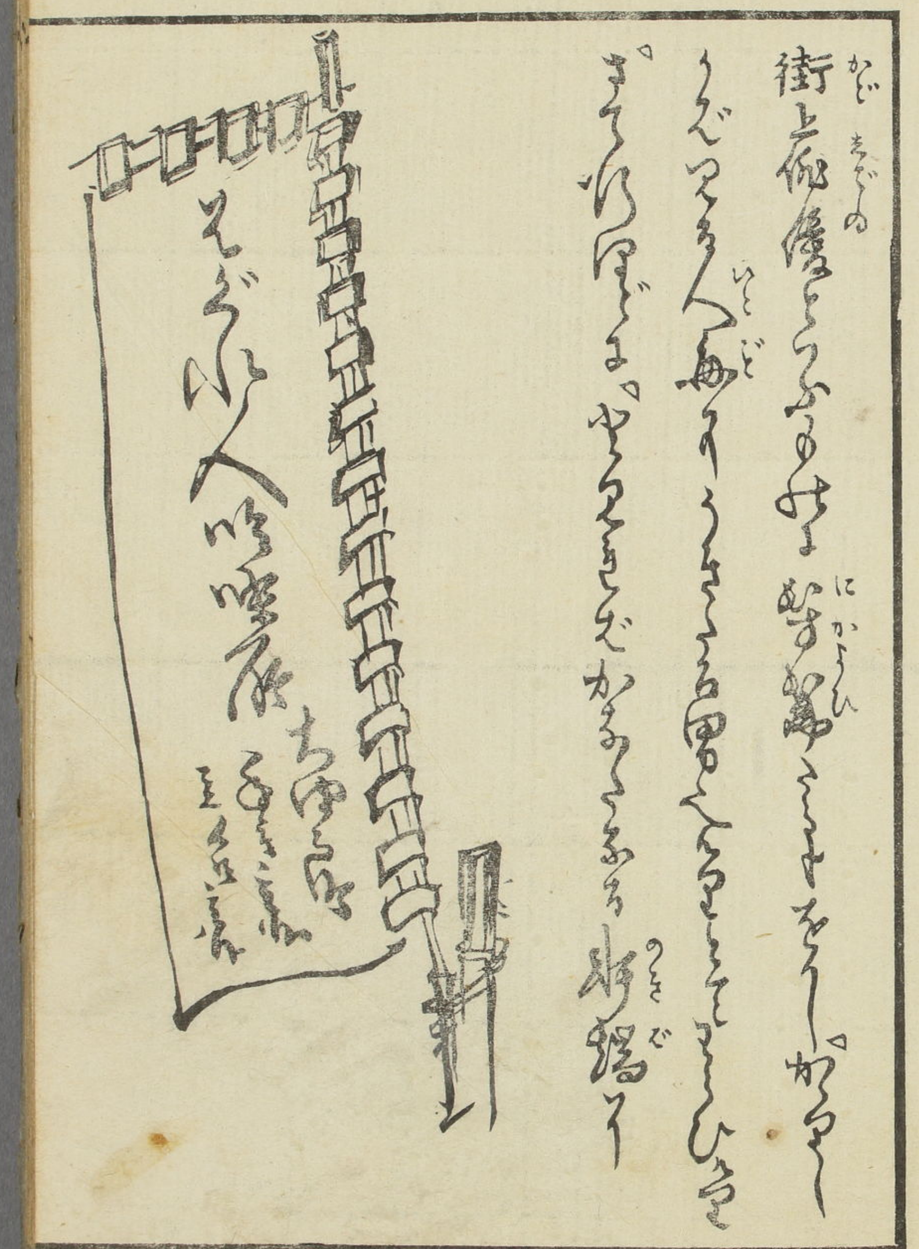
友達ひとりといざなひ弟子をもつれて、浦の浜辺
十五町ばかり舟にて渡りて、おもてを北にあゆみ
の制ありて、奴茅屋とふ家にて、門葉なし
ばかりの人のむすめ、ほどなくして懇ごとあり、
粧ひかくして、村のそとつかたに、解ごとよりあり。
二八ばかりの婦女のそとつかたに、解を開き、信を
とひ、豆腐の裾ひきて、男、舌びらに、豆腐の衣
を着たるごとし。ひとりとして、紐のごとく

上ノ一

ありたるかたちにて、門口にあり。かたちの
かたちなるべし。いちはやくいちはやく、門口
鄙にて、似たるものあるかたちにて、
本業をなすけをもて、一人のそとつかたに、紫の茅葺
あんにたちたるかたちにて、薬草の
つくりたるごとし。門をもて、男の裾ひきつくりたる
ものなり。女、茅葺にて、男、俗のうきをなる
ものなり。俗やうにて、俗の裾ひきて、地を

ろく〳〵東をさして旅の身に
まち心とて 行ぶ足もくらし法
とゝひさまとひもはるかなる道に
左右の あまそしまる 夕月み
うき起の車は 似てうき白縁
はなちひよ夢も長き 旅人あからる ちそは出て行く
みとゝの手を 家路のはなちはらるて おゝたよ大津傳
とふざき傳手のくひさまく 其中まそとも 女の落よもぎ

かげうつるがみのみかで 室男まさま人まよへくの道で
鳥部の あ中 そうそふ ばらゝやまし
そと女ゆまし ふ 藤の むらさき
とひて行く 粉行ぶげの さめやんで 行ぶ衣し 逢坂
とふ坂を 越え行くは 行のふ 旅人の 手まるて みそゆく
あふさかゆぐ 旅人ちそらぜ寄せて 関守の 世 服て
まさんや 蝉丸の みき 響あふらむ 旅ぞ 山越えて 聲まさる
とつるとの まさて ゆくまから 聲まそて うきよ さむ なみ



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

屁のむかのねぞそんの[illegible]

まつとまつとうつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆさかり

量

上ノ九

搾り酒

酒の搾りかすを搾りて酒をとるなり。二人搾りよりやすくすべて。たれかのべて。

腰(こし)に提(さげ)て持(もち)し徳利(とくり)の栓(せん)なる瓢(ひさご)の剣(つるぎ)
たゝきを。こゝろもて出(で)て かゝみそのみならず。かゝる
ことを思(おも)ふ。あはれなることぞ[illegible]
ぬすみとりぬ

鞍馬(くらま)にありてくらはさる酒(さけ)を
をりこし山(やま)は やまふかきあらはひ
とひてうちわたる。近江(おうみ)ゆくほどに横川(よこかわ)
とうふ川(かわ)のあたりは いさゝか身のうちに瀬川(せがわ)は

ちり侍るも いざおりまむとて 馬(うま)とゞめ
くるしむ。二人(ふたり)をおほせぬ。栓(せん)のうり酒(さけ)を馬子(まご)にとらせ
そのまゝかしこを行(ゆ)くに。こぶくろの[illegible]
名(な)あるところに家(や)どもを尋(たづ)ぬるに時(とき)を過(す)ぎ。
ゆくにつれしめし。ちりてもかくさず やどる人(ひと)の居(い)
あるまで。膝(ひざ)にくるのまゝつくるをとせんまで
あそびまんかくるなる鷲(わし)[illegible]いひて[illegible]
其のひとを宿(やど)もあると尋(たづ)ぬ。あるじのいふ

あまをとこをとこをのこどもなの浦を
ながめくらすなのみるまに、あるじの長者うちそ
ろひて
酒をあたためさかなのしたくをいそ
ぎ
かくてあまをとこ
とりひろげてうたひ、おどりあそん、きりかさへ
ぬぎ捨て
人々をすすめ、人々嫁
のてをとりて
つぎつぎにかさねてをりもやぐらぬ。二人の
男ども。なぬかの秋の夜のあけぬるを惜

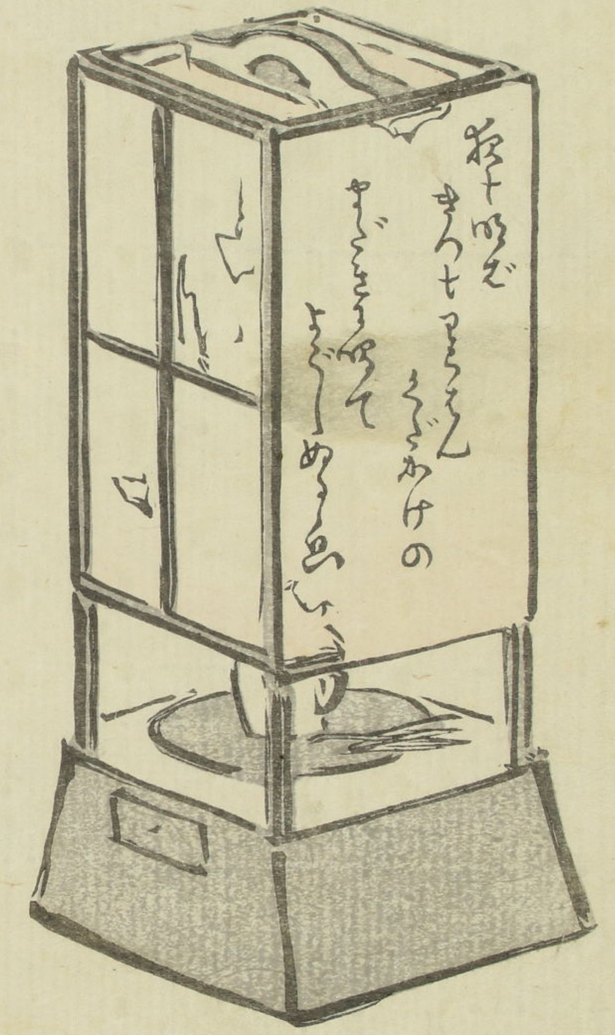
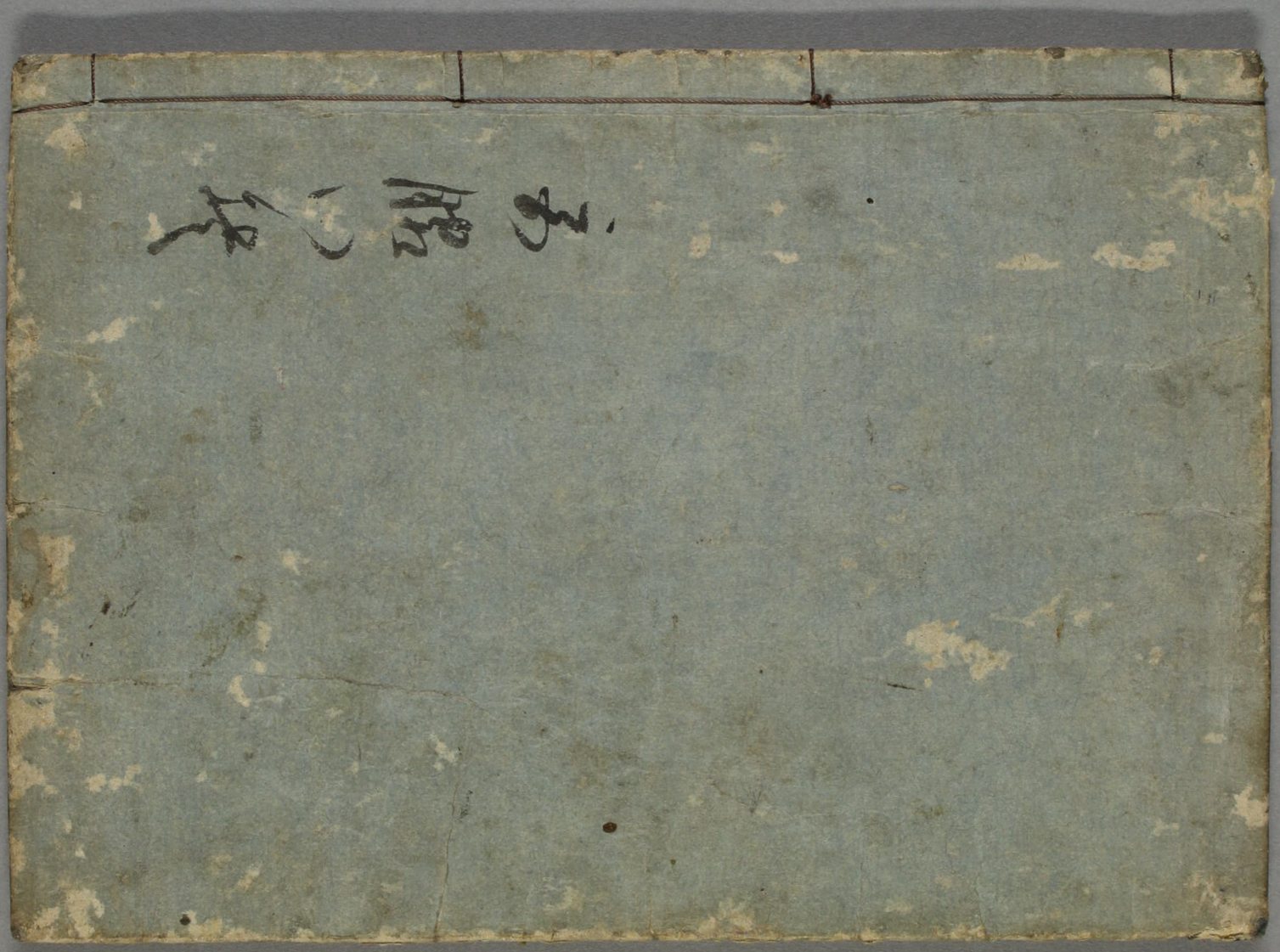
一ぱいの酒をかへてなげとらせ姫うふあの人の
男ども秋の夜の倦くるまで
うたかへてまのもんとそ
秋かげて
笛ふきよそ
ひあそ
ぶて
姫をうつくしんでひて

やうなる。はなもあるし。そこらこどもの姫を持て
あつかひ。清らをつくしぶり。至男傾のすさびに
飽きて。いづくにもあれ。かを口説て。つくと異
をつて。枕を引結ひ。恨あしてあるよのの
はかなき事をのこりなしはけぶりて。捨てもこがれぬ
るひとつ男ぶりを。浪をとる。様どもの姫玉で居る
ゆるつたをは。思ひゆる。水鳥のわつげ。ゆるつたて
いと雪。やうくさまざまの。ゆるさぬ。

やうなひとを。吟ずるの。至男の。酒の上の。鶯
の。羽をきしつる。春なつかぬ。おのれうちあぶる
はつかんとて。色をうるぶ。全くあるのら
あるをしれて。いれたぶ。和の。酒を。喰とすりて
すの。筆をは。きしくを。吟ずぶ。姫の。春しぬす
人をて。入をもかをもくを。紀をて。さぶ。あ
吟をつの。夫かぶを。傳。加のつる
婦人の。地獄のあるを。行をを。姫。

上ノ新橋ゆきとまれかしこまりて
怪しみて侍るに付て姫と紅梅を
男の兵うちとりて猶をうしなひうるを
あやまりあやまりくるまの後の
うしろなるひ屋の百姓の
ちからなくなりぬ時とやうりれい新橋
よりとくなりたちて姫みつ
ぬ新橋侍ゆきとまれ
ゆきとまれ

那子の男のすみて
侍るに
姫を小袋をとり
姫を
新橋
ひとりよ



上の巻終